

# 1999年度 課題別共同研究会報告

(1999. 10. 1～2000. 3. 31)

## 人格発達と教育研究会

代表者◇高垣忠一郎(産)

### 第4回研究会(1999. 11. 16)

テーマ①いじめ克服の研究

②ある事例について

報告者①山本奈々絵氏(社会学研究科院生)

②辰巳 朋子氏(京都市下京区青年の家)

山本氏より、いじめの後遺症の克服のプロセスについての研究報告があった。いじめの後遺症の克服を自己肯定感と同一性の達成という視点からみ、いじめの後遺症を心的外傷後ストレス障害ととらえ、その癒しのプロセスと重ね合わせながら、いじめの後遺症を克服するプロセスを考えるものである。討論では仮説されたプロセスの段階があまりにも一直線にきれいに描かれすぎているのではないかという問題が主に議論された。

辰巳氏より、南青年の家の「しごと・おためしプロジェクト」の取り組みについて報告があった。高校生や青年がいろんな仕事を試しに経験してみることが、彼らにどのように受け止められるか、また職場にどのように受け止められるかが報告され、学校現場での関連する取り組みの経験から意見交流がなされた。

【高垣忠一郎(産業社会学部)】

### 第5回研究会(2000. 1. 14)

テーマ①「学級崩壊」

—子どもとの出会いなおしは可能か—

②教師・生徒・親に対するサポートシステムのあり方について

報告者①春日井敏之氏(西城陽中学校教諭)

②浦田 雅夫氏(社会学研究科院生)

浦田氏の報告は、今日の学校の子供達の問題を抱える問題が個人の心理的問題の解決によって解消されることもあるが、実際には彼らを取りまく環境がその要因になっていることも多いゆえにその環境システムに働きかけるエコロジカルなアプローチの必要性を論じ、スクール・ソーシャル・ワーカー等の専門家の連携のあり方について問題提起するものであった。

春日井氏の報告は、中学校現場での生徒、特に女子中学生の「暴言」が「ことばのスキップ」になっている様子や、いじめに対する取り組み例等を紹介しながら、今時の中学生に教師がどうつきあっていけばよいのかを考えさせるものであった。

【高垣忠一郎(産業社会学部)】

### 第6回研究会 (2000. 3. 17)

テーマ①ある女子学生の事例

②思春期にあたる糖尿病家庭療育児の  
自己肯定感に関する研究

③いじめの後遺症の克服とその  
プロセス

報告者①芳田 知代氏 (平安女学院中学校教諭)

②宇治 照代氏 (社会学研究科院生)

③山本奈々絵氏 (社会学研究科院生)

芳田氏は中学校の女生徒の学校不適応のケースについて詳細に報告した。家庭的な問題や男性とのつきあいなども含め、この生徒の問題をどうとらえるのかをめぐって意見交換がなされた。

宇治氏と山本氏の報告はいずれも修士論文の報告である。宇治氏は小児糖尿病に罹患している子どもの自己肯定感の実態を知り、何が自己肯定感の育成に関与しているのか、そしてまた糖尿病に罹患し療養を続けることが自己肯定感に関わっているかを分析することにより、自己肯定感を念頭に置いた小児看護のあり方を提言した。

また山本氏はいじめを受けた者がその後遺症をどのように克服していくのか、それを自己肯定感と同一性の達成という視点からとらえようとした。そしてその克服のプロセスを仮説的な6つの段階でとらえている。7人の聞き取り調査からその仮説をほぼ検証することができた。【高垣忠一郎(産業社会学部)】

### 発達相談・発達援助研究会

代表者◇櫻谷真理子(産)

### 第3回研究会 (1999. 10. 31)

テーマ：発達のみちすじと保育・教育

①乳児期の発達と保育・教育

②1歳頃の発達と保育・教育

—1歳半を中心に—

報告者①福井 咲月氏

②木下 孝司氏

最初に、福井咲月氏より主に乳児期の発達と保育・教育について話がありました。その際、乳児期を4カ月、6・7カ月、8カ月、10カ月のそれぞれの段階に分けて、それらの特徴と保育や教育で求められることを確認しました。また、宇治市の母子保健体系を例にとり、乳幼児健診の意義と、健診とその周辺のフォローなどとのつながりのあり方についての説明もありました。

次に、木下孝司氏より主に1歳半の発達と保育、教育について話がありました。ここでは、発達検査中の個別課題に取り組む子どものVTRを見ながら、そこでの観察点や子どもの様子から見えてくる発達の力の説明がありました。また、子どもにとって「生活」とは何なのかという視点で、保育や教育実践に求められるものについてのお話もありました。

【長谷川紀絵(京都府立丹後養護学校)】

#### 第4回研究会 (1999. 11. 14)

テーマ① 2、3歳児の発達と保育、教育

② 4、5歳児の発達と保育、教育

報告者① 藤野 友紀氏 (京都大学教育学研究科)

② 荒木 穂積氏 (産業社会学部教授)

2、3歳児の発達を自我の誕生から拡大、充実の側面から説明していく。自我の芽生えは言葉を獲得してくる1歳半くらいから現れる。そして2歳に入ると自分の意図を貫きつつ、尊重すべき相手の意図にも気付き始める。この時期の事例をVTRで映しながら詳しく話して頂いた。

4歳児は自我が充実するとともに表象機能を獲得していく時期である。これを獲得する事で相手の考えていることを考える=心の理論を自己内に成立させる。(メタメタ認知) また、思考と感情の体制化により、認識力が飛躍的に充実してくるのである。自己と他者とのやりとりがスムーズに行えるようになり他者認識もより拡充していくと言われている。

このように深まった認知力をバネに3次元の世界をきり開いていく。(6歳へ)

次回は、5、6歳児の発達を行う予定である。  
【立田幸代子(社会学研究科)】

#### 第5回研究会 (1999. 12. 12)

テーマ① 6、7歳頃の発達と保育、教育

② 学童期における「かきことば」の発達と「自己」形成

報告者① 丸山美和子氏 (佛教大学)

② 服部 敬子氏 (京都大学)

はじめに6、7歳の就学への接続期の発達課題から説明。まず一つは話しことばを豊か

にし、書きことばへの準備を行うとはどうゆう意味があるのか。2つ目は系列化保存の概念の成立の中身。3つ目に時間概念や生活の見通しをどのような筋道で得ていくのか。4つ目は数の操作の基礎となる力を説明して頂き、更に障害児の就学指導のポイントを概略的に紹介して頂いた。午後からは、就学後子ども達が、自己信頼感を養いながら書きことばをどの様に獲得していくのか。また「9才の節」とよばれる質的転換期に、集団的「自己」形成がいかに大切かを講演して頂いた。

【立田幸代子(社会学研究科)】

#### 現代教育思想研究会

代表者◇林 信弘(文)

#### 第2回研究会 (1999. 7. 10)

テーマ：ギリシア哲学と実存思想

—主観性の現象学—

報告者：日下部吉信氏(文学部教授)

本報告の主旨はギリシア哲学を構造的自然概念と主観性原理の相克の修羅場として捉えることによって、ギリシア哲学の背後で作動していた原理に光をあてようとするところにある。哲学はいわば「地」の上に描かれた「図」であって、その下にはめったに顕在化することのない構造的な沈黙の原理、自然概念があった。「自然」(ピュシス)は印欧諸語分岐以前に淵源するほとんどアルケオロジックな概念であり、それはいわば集合的無意識として印欧語族に属する古代諸民族、とりわけギリシア人の意識を潜在層から規定し

ていた。前6世紀のピュタゴラス哲学と共に主観性原理がギリシアに立ち現われたとき、それは必然的にこの構造的な自然概念と相克の関係に立ちいたらざるをえなかった。ピュタゴラス派に対する大規模な迫害、ヘラクレイトスの怒り、エンペドクレスの苛立ち、アナクサゴラスに対するソクラテスの反発、プラトンのイデア思想に対するアリストテレスの反発などは、すべてこの相克の現象諸形態とみなされねばならない。否、ギリシア哲学そのものがこの相克の現象形態なのである。このような見地からギリシア哲学を見ると、ギリシア哲学の本体はピュタゴラス派の学統上にあったソクラテス・プラトンにではなく、ギリシアの自然哲学にこそあったのではないか。ソクラテス・プラトンを中心とするギリシア哲学史観は「近代の主観性の形而上学」の視点から見られた哲学史観でしかないのではないか。したがってきわめて不当なものではないか。本報告は、ギリシア哲学を構造的な自然概念と主観性原理の相克の修羅場と見る観点から、従来のギリシア哲学史観を根本的に問いなおそうとするものである。

【日下部吉信(文学部)】

※本報告要旨は、第30号の掲載に間に合わなかったため、今号に掲載しました。

### 第3回研究会 (2000.3.17)

テーマ：人間の自然と歴史

—歴史的人間学の検討—

報告者：宮嶋秀光氏(名城大学)

近年、ドイツでは「歴史的人間学」という新しい教育研究のスタイルが登場してきている。これは、かつて戦後の一時期、旧西ドイ

ツや日本で流行した「教育人間学」の再興ともいえるが、しかしそれは、「人間自然」のとらえ方という点で、かつての「教育人間学」とは全く異質のものでもある。つまり「人間自然」は、従来の「教育人間学」におけるように統一的で普遍的なものというよりは、むしろ「多元的」で「歴史的」なものともみなされているのである。本報告では、この新しい構想を検討する作業の一環として、近代「人間学」における「自然」や「歴史」という概念の変遷を再考することによって、この構想が、従来の「人間学」の伝統に属するというよりも、むしろ近年のポスト・モダニズムと深く関わっていることを指摘しようとした。

【宮嶋秀光(名城大学)】

### 統計教育研究会

代表者◇長澤克重(産)

### 第2回研究会 (2000.1.29)

テーマ①統計的検定の限界と問題点について

②統計学教科書プランの検討

報告者①佐野一雄氏(福井県立大学)

吉田 央氏(東京農工大学)

①モリソン、ヘンゲル著『統計的検定は有効か—有意性検定論争—』梓出版を、テキストとして、統計的検定の有効性に関する論争について議論を行った。ここに収められている諸論文の論点は古典的な批判論といえるが、「統計的検定万能論」が優勢である今日においてこの点を再確認することの意義は大きかった。この本で取り上げられている諸論点

をめぐって、主要には確率的方法を適用するための諸条件について、意思決定の方法としての統計的検定論と基礎科学的研究としての推論の違いについて、議論を行った。テキストの論調は批判的な面が前面に押し出されており、それは統計的検定を無批判に利用する事例が目立つ現代の時流への警鐘としての意義をもつが、一方で、著書たちがいう統計的検定を適用できる条件を満たしている事例も具体的にあげておく必要もあるのではないか、という意見もだされた。

②今年度中に予定されている教科書出版のプランについて、内容と執筆分担の確認を行った。原稿提出締め切りは8月末の予定。

【長澤克重（産業社会学部）】

**環境教育研究会**

代表者◇笹谷康之（理）

**第1回研究会（1999.4.9）**

テーマ：EMSの不適合事項報告書

報告者：平井 孝治 氏（経営学部教授）

**第2回研究会（1999.4.13）**

テーマ：環境監査の証拠論1

報告者：大森 明子氏（経営学部研究科）

**第3回研究会（1999.5.23）**

テーマ：大学環境教育と問題解決能力

報告者：北条 祥子氏（尚綱女学院短期大学）

小堀 洋美氏

（武蔵工業大学環境情報学部）

榎本 義行氏（東京国際大学国際関係学部）

上田 泰史氏（慶應大学環境学部）

大学環境教育研究会の毎年のミニシンポジウムも回を重ね、1999年度は、学生の自主的な問題解決能力の育成にまで踏み込む議論が進められるようになった。教員2名、学生2名の、計4名の発表を聴くと、いずれも学生間や学生と社会人との環境コミュニケーションを広げている点が共通しており、相違点も目立ち、興味深かった。

北条祥子は、「『環境ホルモン』などの身近な題材を使った環境教育」と題して、尚綱女学院短期大学における、女子短大生の生活実感に対応した実践的演習プログラムを紹介した。洗剤や化粧品といった日常生活品が取り上げられ、学生が母親を巻き込んで製品の成分表示を克明に調べるという負担が相当大的な課題をまじめにこなしている点が、圧巻であった。高校までの授業でもそうであるが、大学の授業ではなおさら生活とは無関係と学生が認識している今日において、母性に訴えて徹底的に生活に密着した授業を行う効果が評価できる。

小堀洋美からは、「大学におけるISO14001の認証取得 —その環境教育実践の意義」と題して、武蔵工業大学環境情報学部のISO14001に基づく、学生の教育訓練と、有志学生を含めた内部審査等の学生とともに築く環境の継続的改善のしくみについて報告があった。

学生と教員や事務員が協働することによって、環境教育が、環境マネジメントシステム構築の実践と、表裏一体で促進されている点が印象的であった。

上田泰史は、「現場体験学習による環境学習のあり方」と題して、東京国際大学国際関係学部下羽ゼミの活動の蓄積に基づき、環境問題が深刻な国内外の現地体験の学習の成果と学習プロセスについて報告した。下羽ゼミの学習プロセスの準備・事前学習、現地訪問、レポートの作成とゼミでの報告・共有、解決策の策定を含めた報告書の作成と発表・発信という、四つのステップは、ISO14001と同様のPDCAサイクルとみなせる。さらに、環境NGO・他大学の学生等との交流の中で、外部のチェックを受け、継続的改善につながっていると考えられた。

榎本義行は、「学生の全国ネットワークと環境活動のあるべき姿 ―きゃんぱすえころじー実行委員会の活動を通じて」と題し、ごみダイエット学園祭の慶応大学での実践から他大学への波及的展開までや、全国の学生が集まるギャザリングの成果等を発表した。携帯電話・PHSとインターネットとを使いこなし、飛行機で国内外を駆け抜け、フットワーク軽く時代をリードする若者らしいネットワーク活動を行っていた。また、教員は教える人で、学生は教わる人といった関係性を越えて、教員が学生の主体性を認めて引き出すように、教員にファシリテータを期待している点が特徴的だった。

北條は、女子短大の一授業という制約条件の中で、生活から考え母親とのコミュニケーションを起こすまで至る、いわゆる教育原理という教育内容・教育方法・教師の熱意の三

拍子揃った正統派のプログラムを示していることに対し、小堀は、学部の教職員と学生とが協働する社会的しくみづくりとしての環境教育のプロセスまで言及した。一方、上田は、ゼミの良き伝統の上に立脚して「なぜか？」と問うところから始まる真摯な議論を進める正統派の路線で、榎本は軽やかなネットワークを重視してつながりを広げていく路線でと、対比的だった。良い悪いはさておき、浅田彰の『逃走論』風に言えば、上田のパラノイアに対し、榎本のスキゾフレニと言えようか。

今日、民間企業はもちろん、大学、自治体、その他多くの組織にISO14001の認証取得が広まり、環境分野ではマネジメントの考え方が広まりつつある。そこで、大学では、下羽ゼミのゼミ活動プロセスとしてのPDCAによる継続的改善にみる環境教育と、武蔵工業大学環境情報学部の環境マネジメントシステムとの融合を目指す解決策を求めるべきであろう。さらに、榎本の指摘する学生の水平のネットワーク・コミュニケーションや、北條が実践した親子のコミュニケーションと言う、拡張性のある環境コミュニケーションを展開すべき時代が来ているのであろう。環境教育と、環境マネジメントシステムと、環境情報システムの構築・運用をも含めた組織や団体を越えた環境コミュニケーションとの3点の融合に、環境問題解決のカギがあるように思えたミニシンポであった。

#### 第4回研究会 (1999. 6. 4)

テーマ：環境監査の証拠論 2

報告者：大森 明子氏 (経営学部研究科)

**第5回研究会 (1999. 6. 18)**

テーマ：環境報告書の現状

報告者：東田 明 氏 (経営学部生)

**第6回研究会 (1999. 7. 1)**

テーマ：OBからみた大学環境教育

報告者：下村 純子氏 (環境市民)

森島 朋三氏

(大学コンソーシアム京都事務局次長)

**第7回研究会 (1999. 10. 15)**

テーマ：ISOエコラベリングの一般原則

報告者：平井 孝治 氏 (経営学部教授)

**第8回研究会 (1999. 10. 29)**

テーマ：タイプ2のエコラベル

報告者：平井 孝治 氏 (経営学部教授)

**第9回研究会 (1999. 11. 5)**

テーマ：環境会計のこと始め1

報告者：東耕 功 氏 (経営学部研究科)

**第10回研究会 (1999. 11. 26)**

テーマ：環境会計こと始め2

報告者：東耕 功 氏 (経営学部研究科)

